マリアの賛歌 (マグニフィカート)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24756

マリアの賛歌（マダニフィカート）

院長 佐々木 哲夫

ルカによる福音書 一章四六～五六節

46 そこで、マリアは言った。

47 「わたしの魂は主をあがめ、

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48 身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。

49 今から後、いつの世の人ともわたしを幸いな者と言うでしょう、

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、

50 その憐れみは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。

51 主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、

52 権力ある者とその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

53 飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

54 その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、

55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

56 マリアは、三ヶ月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。

本日の聖書は、「わたしの魂は主をあがめる」で始まっています。この箇所は、宗教改革以前より「聖母マリアのカンティウム」と呼ばれ、晩の祈りの時にグレゴリア聖歌の旋律に従って朗読されてきました。特に、ラテン語訳聖書の最初の言葉 Magnificat (あがめる) に因んで「マグニフィカート」と呼ばれています。宗教改革者ルターは、一五二一年に「マグニフィカートのドイツ語訳と講解」という結構長い文書を書いており、またルター派の作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、一七二三年に、この箇所をテキストにオラトリオ「マグニフィカート」を作曲し、今日においてもクリスマススの時期に演奏されています。本日は「マグニフィカート」をテキストにして

礼拝の時を守りたいと思います。

☆

天使ガブリエルの受胎告知を受けた後、エリサベトを訪問したマリアは、言います。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」(四六〜四七節) この表現は、典型的なヘブル詩の形式、同じ意味を重ねる表現になっています。すなわち、「わたしの魂」と「わたしの霊」、「主」と「救い主である神」、「あがめる」と「喜びたたえる」が対応しています。

マリアは、「わたしの魂」「わたしの霊」と表現します。人間を、肉体と精神と魂に分離させる考え方があります。現世に存在する私たちは、肉体も心も魂も丸ごと一つになっての存在ですので、ことさら、分離させる必要がないことは承知しています。とはいえ、「私」ではなく「わたしの魂」「わたしの霊」という表現、また「主を偉大なものとする」「救い主である神を喜ぶ」という表現に、全身全霊を持って神を賛美しているマリアの信仰姿勢を読み取ることが出来ます。その姿勢は「身分の低い、この主のはしため」と徹底的な謙遜の表現を自分に用いていることから読み取れます。「身分の低い、この主のはしため」の直訳は「貧しいもの、虐げられているもの」「女性の奴隷、女性のしもべ」です。文全体が、マリアの謙遜な信仰を浮き彫りにしています

サムエルの母ハンナの祈りを参照したいと思います。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧く

ださい。はしたために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」(サム上1・11) 比較の意図はありませんが、マリアの謙虚な信仰姿勢は特徴的です。

謙遜であることを誇って「身分の低い、この主のはしたため」の表現をマリアが用いたという批判に対し、宗教改革者ルターは、「神のまえで、人が誇らねばならないことは、無価値な私たちに与えて下さった神の純粋な善と恵みのみである。人は真に謙遜であるときほど、謙遜について知る事は少ない」と解説しています。後者の「人は真に謙遜であるときほど、謙遜について知る事は少ない」について、ルターはさらに説明しています。「高いものに目を留めたからといって、人々が高慢になるものでないように、人々に謙遜であるように教えても、それは無益である。人が取り除かなくてはならないのは、高いとか低いとかといった対象物ではなく目である。心と精神を変えなければならぬ。本当に謙遜であるならば、自分自身では決して自らの謙遜さに気づく事はない」と論じています。すなわち、マリアの謙遜は、真の謙遜さであると論じています。

☆

さて、マリアの言葉は、「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」(五〇節)を境に変わります。前半部の四六節から四九節のいずれの節にも「わたしの」「わたしに」「わた

しを」というように一人称表現が登場していますが、五〇節からは、三人称すなわち「主が」という表現が前面に出てきます。例えば、「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」（五〇節）のように、主と主を畏れる者との関係に視点が移っています。表現内容が、一気に時間と空間を超越する広がりを見せています。その広がりや延長に、今日の日本の主を畏れる者がいることを願うのですが、それはそれとして、ここで主語が「神の憐れみ」になっていることに注目したいのです。イエス・キリストの誕生の出来事が神の憐れみの実現であるというのです。

ところで、「主は憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」（五四〜五五節）の言葉を聞くと、ユダヤの人々ほどのような連想をするか考えてみました。

「憐れみ」は、旧約聖書では「慈しみ」に相当します。すぐに連想できるのは、旧約の婦人ルツです。ルツが姑に示した態度は慈しみと表現されています。そのルツにボアズが示した態度も慈しみと表現されています。また、ルツとナオミとボアズの三人の出会いは、神から人への慈しみでした。ルツの物語は、まさに、「権力ある者をその座から引き降ろし」「身分の低い者を高く上げ」「飢えた人を良い物で満たす」物語です。

ルツの系図は象徴的です。ボアズとルツからオベドが生まれ、オベドはエッサイの父になりま

す。マタイ一章のイエス・キリストに至る系図には、エッサイは、ダビデ王を設け、イエス・キリストに繋がっていることが記されています。主は、アブラハムからイエス・キリストに至るまで、またその子孫に対してとこしえに憐れみをお忘れにならないというのです。実に、マリアの告白は、イエス・キリストの誕生が、神の憐れみ、慈しみの実現であることを証言しています。

さて、今日の私たちにとって、「思い上がる者を打ち散らし」「権力ある者をその座から引き降ろし」「身分の低い者を高く上げ」「飢えた人を良い物で満たす」という景色は、他でもない神の国の情景であるといえます。マリアは、イエス・キリストの到来によつて神の国が実現されることを、神の偉大さの具体的描写として表現し、主を喜びたたえているのです。マリアのマグニフィカートは、ルターが「神の行為とかえりみは低いところに向かい、人間の目と行為は、高いところのみ向かう。これがマリアの賛歌の動機である」と要約しているように、実に貧しいおとめの深い豊かな信仰内容を表現しているものです。

☆

詩編一〇三編においてダビデは、

わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞつて聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください。

と主を賛美しています。詩編には、感謝 信頼 嘆き 願いなどさまざまな信仰表現が記されています。賛美も信仰表現の一つです。私たちも、ダビデやマリアとともに主を賛美する心を持つ者でありたいと願います。